



## 年末年始の山と小屋

この時期に営業している南アルプス北部の山小屋としては、甲斐駒岳、仙丈岳のベースとなる北沢峠周辺と、私共が関わっている鳳凰三山の各山小屋だけになっている。

今回は十二月二十五日、荷上げのため南御室小屋に入山する。年末に十五人程のツアーが企画されたため、食料品の歩荷と積雪の下見を兼ねている。数日前が連休であったため雪道は踏み固められ歩き易かったのですが、一ヶ月振りの歩荷で五時間もかかり日帰りの予定は諦める事となった。



翌二十六日は天気予報通り早朝から降雪になり、雪の中の下山だったが、夜叉神峠ではミソシとなり下界は大雨だった。下山後はおせち品の買出し等を済ませるが、この天気、山の雪が思いやられます。

二十七日再度入山、ミソシから雨となつた杖立峠前後の道は凍っている。山火事跡に入ってデポして置いた輪かんを着ける息子はスノーシュー、女子従業員はソバ足で三人でトレイスを付ける。

ここ何年か、輪かん等を着けるようになったのは訳があった。平成十四年の年末入山時は、やはり大雪で登山口から南御室小屋まで十時間もかかり、夜の七時半に到着したことがあった。一匹を超えるクラストした雪を長靴で一歩一歩、毎平から小屋まで闇の中を二時間を要し足の指先は冷え切り痺れが取れず、よい教訓となつた事である。それ以来荷物の減量よりまず、歩き易さを優先する事にしました。

十二月二十八日、日帰りの登山者の物音で起こされる、午前三時に出発して来たとのことであった。朝食後三人で薬師小屋の除雪に向かう、先行の登山者は途中で輪かんをデポしてきた事が失敗だったと言いつつ砂岳から下山してきた。



薬師岳小屋入り口は吹き溜まりで一メートル四十センチ位、屋根雪は八十センチの積雪、手分けして煙突や窓と出入り口を掘り出す、一度の降雪で除雪機は走行不能となり、手掘で終了。午後冬型の気圧配置で吹雪く中を、息子を薬師小屋に残し南御室小屋に戻る、両小屋の除雪も終わり、客室掃除と年越しの献立を準備し、後は登山者を迎えるだけである。仕事納めも終わった二十九日から入山者も有り、営業体勢と成った。



近年は登山者も減少し、夜叉神からの入山者は二百人に満たないと思われ、鳳凰山系はバリ干シも少なく、撮影と初歩の冬山を楽しむ方が多く、縦走者は僅かとなっているので、往復の登山者のために、日出山行と温泉を企画する。

で少しは山麓も潤うのかなと思います。それでも昨年よりはいくらか賑やかな年末の人出と成りました。大晦日の夜は例年通りテント泊と小屋の常連さんが年越しを楽しんでいたようです。元旦は朝から穏やかな日となり、登山者の皆様は、晴れやかな新年の初日の出を迎え出発をされて行きました。年末の降雪は樹林を純白に覆い森の持つ美しさを創りだし、早朝の満月の明かりとともに輝いていた風景を、お伝えします。

(薬師・南御室小屋管理者) 小林 賢記



# 第十五回登山教室 (秋編)

## 栗沢山&仙丈ヶ岳の二コースで 大いに賑う

異例の事だが、春の登山教室より早い三月初旬から秋の登山教室の話が持ち上がった。少し早いなと思ったが本年度が「山梨山の日」制定十周年だから各地域で山に関するイベントを実施し大いに山梨の山をPRしたいとの県からの要請があった。いざ実施する計画にはなっているので県の依頼であればと快諾した。早速、先決で研修内容とコースになる山を決める。研修はやはり森林関係と山梨の百名山の話に絞られた。山は募集が二系統になると初級、中級のクラス分けが出来るので複数コース用意するほうが良かったと、栗沢山(二七二四m)と仙丈ヶ岳(三〇三二・二七〇m)に決まった。二系統の募集とは県がJRに委託した集客システム(二〇人)と通常のファンクラブ独自の募集(三〇人)になる。

これらが先行し県が企画する記念イベント下の募集が都心のJR車内に掲示される。たとえば県からの助成金やJRシステムの料金設定を詳細に認識したのはだいぶ後になってからになる。

(3) この事が後になって物議をかもし出すことになるとは知る由もなかった。

自主参加者も入れると当初の予定を大きく上回る盛況ぶりにやはり南アルプス人気は高いと感じる。他地域の「山の日イベント」では参加者が少なく、中には中止を余儀なくされたものもあったと聞いた。

九月三〇日十三・〇〇、簡単なせまの二の後、研修が始まった。

まず森林について、簡単な、しかし意外な知識や様々な効能や楽しみ方を山梨県立大学教授小沢典夫氏から拝聴し、続いて山梨百名山の話を目下足袋姿で歩き調べて、山梨百名山の本の出版に努めた

深澤健三氏(芦安ファンクラブ会員)から山の特徴や楽しい苦労話などが聞かれた。有意義な研修は研修のみの参加者が十分満足する内容だった。

宿泊を担当した山岳館近隣のペンションや旅館はJR方式の部屋割りや対応に間際まで奮闘していたが多くの参加者からは料理の良さと対応の温かさが大変好評だった。



甲斐駒ヶ岳をバックに栗沢山班のいい顔

翌日は、心配された天候も穏やかな朝を向かえ、一同ほつとしながら登山口北沢峠向かう。ここから栗沢山と仙丈ヶ岳に分かれて上る。天候が持てば相向かう山が互いに遠望できるだろう。十人余の各班にそれぞれ三人ほどのスタッフが入り山の話、地域の話、世間話などを咲かせて登る。いつもの和やかな風景だ。紅葉はひんやりとした曇天のせいか、いまひとつ鮮明な色あいではなかった。しかし三五〇〇付近を越えると真赤に染まったナナカマドや黄色いタケカンバにみな歓喜をあげていた。森林限界を越すと足元にはウラシムツツジが一面に赤いしゅうたんを広げ歓迎してくれた。小仙丈ヶ岳直下では合越しに鳳

凰三山、北岳、間ノ岳、そして甲斐駒ヶ岳、仲間が登っている栗沢山、頭を隠した富士山、遠く北アルプス連峰、立山、後立山方面、めつたに見られない白山までかくつきり見える。今にも泣き出しそうな空模様にしては異例な遠望だ。

小仙丈ヶ岳に着くと、栗沢班リーダーの望月氏より無線が入る。今、栗沢山頂上に着きました。皆さん元気ですが、天候が心配なのでアサノ降合行かず下山します。栗沢班はなぜか平均年齢が仙丈ヶ岳班より若い構成になった。皆の元気そうなので満足そうな顔が目に浮かぶ。

小仙丈ヶ岳先の痩せた稜線の岩場に気を配り、仙丈ヶ岳の上りにさしかかると白いものが顔に冷たい。左横を見ると北岳はもうすぐれていて上部は降っているようだった。

気温はだいぶ下がっている。山頂での長居は無用だ。幸い各班もいいペースで山頂に向かっている。

やはり仙丈ヶ岳直下まで来ると誰にもそれとわかる雪が降ってきた。

今年の初体験に皆さんお喜びだ。足がそろっていた為に山頂は思ってたより早く着いた。記念写真もそこそこ下山の準備を始める。すると一部の人から自班のスタッフに苦情を達する声を聞く。内容を聞くと、どうも皆さんと一緒のペースでは歩きにくい、自分のペースで歩かして欲しいとのとららしい。この辺が今回の募集の盲点でもある。JRでは旅行型募集を行ったので当日顔を見るまで個人の状況が把握できない。どうやらこの人達はお客さんで山を歩いている人たちらしい。良くあるツアー型遭難のきっかけを作る自己主張、自己保護、自己満足を優先する人種らしい。

スタッフも添乗業務員と勘違いされては戸惑ってしまう。ボランティアで協力している

尊い気持ちで傷つきそう。馬の背から藪沢小屋トラバースして大滝の頭から登ってきた尾根をリズミカルに降りる。

下では栗沢山班が首を長くして待っていたよつだ。後で聞いた話だがこちらでもこのグループだけ早く帰れないかなど要望が出たらしい。そんなに個人的な動きをしたいのなら、何で登山教室に参加したのかね。と首をひねってしまつ。どうやら参加費が異常に安かったことも要因らしい。

知識もない、技術もない、勿論経験もないだけと山に登りたいそんな人達が安全に山を楽しむための力を養う登山教室であることすら理解しようとしなない。この事はやはり募集の段階でちゃんと認識されるの参加を望みたい。そのほか参加費の格差や前記の部屋割りの問題等々、今回の登山教室が次回登山教室や他の事業活動動提示した課題は多い。

「原点を見失う事の無いように」と見守るファンが多いことも忘れずにしたい。

芦安ファンクラブ 清水 記



仙丈ヶ岳 2班のいい顔

# 筑波山の今昔

我ら芦安ファンクラブは2006年夏に国土地理院の指導の基に「世紀を超えた頂上作戦」(北岳一〇二年ぶりの三角点低下改埋事業)を成功させ、これが縁結びとなり今晩秋に、つくば市の国土地理院を見学し、二十一世紀科学の粋を集積した測量技術を目の当たりにした。遙か銀河系のその先の星から微弱電波を捉え地球の位置を確定するという巨大パラボナアンテナの前では、その敏速な動きに息を呑んだ山男・山女14名であった。

夜の宴では伊能忠敬流、実足の山談議に陶酔したにもかかわらず翌日は筑波山(876M)をハイキング気分で踏破してしまい、紅葉が終わって葉の落ちた木々の隙間から関東平野の眺めを楽しみました。

「日本百名山」深田久弥著によると、「この山が名山と言われるその第一は歴史が古いことである。」

神の祖「御祖」(みおや)の神が、日が暮れて富士山に着き宿を求めると富士の神は断った、御祖の神は怒って「おまえの山は夏冬問わず雪や霜に閉じこめてやる」と言い残して東の筑波山に行き、そこではあたたかく迎えられ歓迎され、「この上なく喜び」「この山は

日月共に幸あれ、人々の集い登り、飲食の物も豊かに捧げるであろつ、代々絶ゆることなく遊楽が続くであろつ」と常陸風土記に記述されていると言いつつ。

この山は登拝のためのケーブルカー

とロープウエーが山頂直下まで設備されていることから四季を問わず老若男女の登拝者が多く賑わっていて、神話の世界が実現している山となつていました。私達は、登山口の筑波山神社でお参りして登山を開始しましたが、参拝所に設置された神社由緒書きの中に「日本武尊は東蝦夷征伐の帰り、ここに剣を奉納して甲斐酒折の宮向かい酒折の宮で軍旅を休めた折、戦を振り返り歌を詠み、問いかけたところ、焚き火の翁が歌で答えた(古事記)」という連歌発祥の云われが説明されていました。私は出発前に、この説明版を見て、酒折の宮のある甲府市から来た自分が嬉しくなつてしまい、何故か山登りがハイピッチになつてしまいました。

そう言えば、聖徳太子は名馬甲斐の黒駒に乗って奈良の都と甲斐の国を一夜にして行つて帰したという、神話もある。私達は今朝、昭和ICから高速道路を乗り継いで高架橋の空を飛び筑波まで五時間余りで着いている。あの大和神話が平成の今、現実となつていることに気付き、山の神は「何もかもお見通しなのか? 甲斐の国から来た我ら登山者だけに、この国の行く末をそつと教えているのかも知れない」と思つてしまいました。

きつと来る年は甲斐の白根の間岳(間ノ岳)に科学技術を駆使した測量技術者を先達し、遙かなる宇宙からのたより(電波)を捉えてみたいと夢を見ました。

芦安ファンクラブ 渡辺典美



新年第一回目の定例会が行われました。今年の事業計画の盛り沢山さに少し驚きです。充実し過ぎるような年になりそうです。会員の様々な個性がいっそうバラエティさを増して楽しい会になりそうです。ところで、このところ雪の南アルプス中腹(標高一五〇〇m)で珍しい光景を見かけています。それは本来別々の地域や標高に生息しているカモシカとニホンジカが同じ斜面で草や木の根をついばんでいる姿です。一見和やかなように見受けられますが、これは生態系には大変な問題です。今日はカモシカを3か所で3頭見ました。そのうちの2頭が7、8頭のニホンジカと一緒にいました。このままでは間違いなくカモシカは縄張りを追われその数を減らすことになるでしょう。さりとてニホンジカを減らせばいいと言う単純なことでもなさそうです。高山ではコバイケイソウやトリカブトの葉までニホンジカが食べ始めています。芦安ファンクラブとしても、今年には高山の動植物の生態系の変化にもさらに気を配りながら、素晴らしい南アルプスの実態をもつと把握していく必要があります。

事務局より



やっと目を出し始めた芦安のフクジュソウ